

フェアリーフェンサーエフ～無口っ子と旅をする～

黒金の孤狼

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

女神様によってフェアリーエンサーエフの世界に転生した、オリーブとエフオールが一緒に旅をするだけのお話。基本的にほのぼのとした物語になる予定ですが、時々シリアスになる…かも？

目次

プロローグ	1
第1話 出会い	3

プロローグ

「此処はどこ？」

気が付くと真つ白な空間に寝転んでいた。ていうか直前の事が思い出せん……うぐむ

「あ、やっと起きましたね。良かったあ……」

何だかおっとりした感じの女の人の声がする。起き上がり俺はその女性に尋ねてみた

「あの……此処はどこですか？」

「あ、すみません。ご説明しなければいけませんね……私は女神、因みに此処は天界です」

……女神とか神様って居たんだ。てつきり空想の産物だと思ってた

……

「それと……確認ですが貴方は不知火 煉弥さんで間違い無いですよね？」「え……はい。そうですね」「そうですね……すみませんでした！」

「……はい？」

急に頭を下げられ困惑する。えつと……何事？

「あのとりあえず頭を上げてくれませんか？急に謝られても何がなんだから」

「実は……」

女神様は顔を上げて説明する。彼女の話のを要約すると

・人にはそれぞれ人生スケジュールという物があり、それにその人に起こる不運や幸福、出会いなどを書くのが女神の仕事

・俺のスケジュールを書いていたらインクを盛大に零してしまい、スケジュールが塗り潰されてしまい死亡扱いになった

という事らしい。まあ……悪気があった訳じゃ無いし責めたりはしないが

「本当にすみません！」

何度も何度も頭を下げる女神様。うぐん……どうしたものか

「あの……気にしてませんか」

「でも……死なせてしまったのは事実です……あ、そうだ！だったら何

処か別な世界に転生しませんか？」

「…まあ、出来るならしたいけど…良いんですか？」

「勿論！それで何処が良いですか？」

「うーん、そうだなあ……」

暫く俺は悩んだ…小説とかで良くある転生を自分がするとは思わなかったし…よし

「じゃあフェアリーフェンサーエフの世界で…あ、出来れば原作終了後が良いかな」

「良いんですか？原作に絡まなくても」

「うん、俺が関わった事で歴史が歪んじゃうかもしれないし…何より一般人の俺が生き残れるとは思えないし…」

「…成る程し分かりました、では転生させますね…あ、忘れてました？」

そう言い女神様は小さな手のひらサイズの子狐を俺に手渡す

「この子は？」

「これは貴方のパートナー妖聖です。生きていくために必要でしょう？」

……確かに、妖聖が居ると居ないとじゃ戦力の差が大きいし、何より自分の身を守るのにも必要だな

「ありがとう。よろしくな…えーと」

「名前は付いてないので好きに呼んであげて下さい」

「そっか…じゃあお前の名前は久遠（くおん）だ。よろしくな」

♪ぎゅー♪

頭を撫でると嬉しそうに鳴いて飛び跳ねる。うわあ…可愛い♪
「準備も整いましたし、改めて転生しますね」

「ああ…お願いします」

「では…第2の人生、楽しんで下さいね？」

その言葉を聞くと同時に光に包まれ、意識が途切れた…

第1話 出会い

さて、無事に転生出来たみたいだが…

「なんでいきなり落ちてるんだああ!!」

現在、俺は空から落下していた。転生したら紐なしバンジーして
るってどういう状況だよ!

〃ぎゅー♪〃

「お前は何で楽しそうなんだ!?ていうか何とかしないと!」

転生したばっかりなのに死んでたまるか!

「久遠、何とかならないか!」

〃ぎゅー♪〃

任せろと言った感じで俺の前へ飛び出し子狐の姿から大人1人が
乗れそうな位の大きさになり、俺を乗せて地面へと着地する

「すげーなお前…ありがとな久遠。助かったよ」

〃ぎゅー♪〃

嬉しそうに一鳴きし、元の大きさに戻り肩の上に乗っかる。

「さて…無事に転生出来たは良いが…此処は何処だろうか。どうやら
ダンジョンみたいだが…ん?」

辺りを見渡しているとドラゴン型の魔物と対峙しているフードを
被った少女が目に入る。苦戦しているみたいだ

「見過ごす訳にはいかないな…:久遠!」

〃ぎゅー♪〃

俺の呼び掛けに反応し、光に包まれ日本刀へと姿を変え俺の手の中
に収まる

「それがお前の武器形態か…よし行くぞ!」

武器を構え、女の子を助けるべく駆け出す「くっ…この…:しっこい
…!」 〃エフオール、危ない!〃 「あぐっ…!?!」

フードの少女がドラゴンに吹き飛ばされる。その衝撃で持ってい
た弓が光り、狐耳の少女に変わる

「エフオール、しっかりして下さい!」

「うう…果林、逃げて…」

「何を言ってるんですか！そんな事出来るわけ……!?!」

トドメと言わんばかりにドラゴンが少女達へ腕を振り下ろそうとする。

「させるかあつ!!」

「ガキイイン!」

間一髪、ドラゴンの腕を刀で防ぎ力任せに弾き返す。

「そのこの2人、大丈夫?怪我は無い?」

「はい、何とか」

「ん…平気」

「そっか…なら良かった」

2人の無事を確認し、安堵する…つてあれ?もしかしてこの子達つてし

「まさかな…いきなり原作キャラに会うなんて…いや…でもなあ…」

「…?」

ブツブツと呟く俺を首を傾げて、不思議そうに見つめるフードの少女。うわ、可愛い

「グガアアア!」

おっと…そういえば戦闘中だったな…

「見逃しちゃくれないよなあ…やっぱり。ちよつと手伝ってくれないかな…助けに入ったは良いけど俺1人じゃ太刀打ち出来ないから」

自分で言つて物凄いい情けないが、こればかりは仕方ない。魔物とは無縁の世界に居たしし

「ん、分かった…果林、行くよ」

「はい!」

狐耳の少女の体が光り、再び弓に変わってフードの少女の手に収まり、臨戦態勢に入る

「武器は弓か…よし、君は後ろから援護して。俺が前衛に出るから」

「ん…分かった。任せて」

「よし、やろうか久遠!」

「きゅっ!」

久遠の返事を聞き、ドラゴンへと駆け出し横一閃に切り裂く

「グガアアア!?!」

「よし、効いてる…うおっ!?!」

思い切り振り下ろされた爪をギリギリで回避する。危ねえ…あんなの貰ったら絶対、死ぬわし

「…っ!」

「ギヤアアアツ!?!」

少女が隙を突いてドラゴンの瞳を射抜く。激痛に悶え苦しみ倒れる

「トドメだ!せええいっ!」

高く飛び上がり、急所へ刀を深く突き刺す。暫く痙攣した後、動かなくなり粒子となって消滅した

「ふう…終わったな」

「きゅー♪」

久遠も元に戻り肩へ乗る。此処がお気に入りなのかな？

「あの…ありがとうございます」

「助かった…ありがとうございます」

そんな事を考えていたら狐耳の少女とフードの少女がお礼を言い、頭を下げる

「ああ…良いってば、お礼なんて。当たり前の事をしただけだし…それに2人の援護が無かったら多分倒せなかったし。えーと…名前、聞いても良いかな?俺は煉弥、不知火 煉弥」

正体の予想は付いてるが、確信が持てない以上は下手な事は言えないからな

「エフオール…こっちの子は」

「果林です。レンヤさん本当に助かりました…」

ああ…やつぱりエフオールと果林か…お気に入りキャラにいきなり出会うとは…運が良いんだか悪いんだか

「エフオールに果林ね。2人はこんな所で何してたの?」

「はい…実は私達、旅の途中なんです」

「旅…2人だけで?差し支えなければ聞かせてくれないかい?」

「私は構いませんが…」

果林は言葉を濁し、エフオールの方をちらりと見る。おつと…聞い
ちやいけなかつたかな」

「大丈夫…平気だから」

「分かりました…ではお話しします。私達は幼い頃、フェンサーを育成
する施設に居ました。戦う事だけを教え込まれてきました」

「逆らったりしたら殴られた…酷い事いっぱいされた…っ」

消えそうな声でエフオールは呟き俯く。表情は見えないがきつと
泣きそうになつてゐるだろう…よっぽど酷い目に遭つたんだな…

「そんな毎日が続いて…エフオールは段々と感情が無くなつて…そ
んな彼女を見ていられなくて施設から脱走したんです」

そう語る果林も辛いのかちよつと涙ぐんでいる。ゲームじやあま
り触れられなかつたから分からなかつたけど…相当暗い過去を
持つてるな」

「その時は生きる事で精一杯だった…でもふと時々思うの…私と
同じように戦う事だけを教えられた子達はどうしているんだろうつ
て…」

今まで黙っていたエフオールが俯いたまま、ぽつりぽつりと話し始
めた

「もしかしたら前の私みたいに…戦うだけが目的の化け物になつて
るかもしれない…だから」

言葉を一旦切り、顔を上げる…若干、涙目だが決意の籠もった瞳を
していた

「その子達を助きたい…世界にはもつと…楽しい事がいっぱいあるつ
て…教えたいの…」

「…もしかしたら会えないかもよ？」

「絶対諦めない…」

「…会えたとしても理解してくれなかつたら？」

「それでも…伝わるまで何度でも教える…っ」

迷うことなくエフオールは言う。ふう…心配するまでもなかつた
な

「そっか…そこまで心に決まってるんなら大丈夫だな…。その旅に俺も付いて行っても良いかな？」

「え…？」

「いやな、そんな混み合った事情があつたなんて思わなくてさ…聞いたちゃつた以上、無視出来なくてさ。それに女の子2人だけっていうのも何かと危険だし」

エフオールはフエンサーだから、よほど強力な魔物ではない限り、苦戦する心配は無いだろうが、それはあくまで魔物と対峙した時だ。人間…しかも同じフエンサーだつたらそうはいかない。敗北…下手をすれば命を奪われかねないしな

「有り難い申し出ですが…良いんですか？レンヤさんも旅の途中なのでは？」

「ああ、それだつたら心配ない。ただ宛もなく気ままに旅していただけだし」

転生したばかりだから目的なんて無いなんて言っても信じる訳ないし…まあ行く宛てがないのは本当だし嘘は吐いてない

「まあ…迷惑でなければけどさ」

「そんな…迷惑だなんてとんでもない。どうします？エフオール」

「ん…私は付いて来て欲しい…2人きりは寂しい。果林はどう？」

「私も出来る事なら一緒に来ていただけると有り難いですが…」

「よし、じゃあ決まりだな。これから宜しくな？エフオール、果林」

「はい、此方こそ宜しくお願ひします」

「宜しく、レンヤ」

差し出した手を2人が握り返す。心なしか2人とも嬉しそうだ

、クキユ、

「…：…つ／＼／」

控え目なお腹の鳴る音が聞こえ、エフオールの顔が真っ赤になる
「そういえば朝から何も食べてませんでしたね」

「お腹…すいた」

「はは…じゃあ一旦、街に戻ろうか」

「うん、早く行こう？」

そう言いエフオールは歩き出す。全く…そんなに急がなくても

「あの…レンヤさん」

「ん?どうした果林」

後を付いて歩き出そうとしたら果林に呼び止められる。なんだか真剣な顔をしている

「一つだけ…お願いしたい事があるんです…聞いて貰えないでしょうか」

「俺に出来る事なら何でもするよ。言ってみて?」

そう返事をする。果林は深呼吸をして、言葉を発した

「あの…エフオールを女にして下さい!!」

「……あ?」

ちよつと待て、何て言ったこの子!?とんでもない事口走んなかったか!?

「えつと果林?自分が言った台詞の意味、分かって言ってるよね…?」

「え……あつ!す、すみません!間違えました!／＼／＼」

顔を真っ赤にして、慌てて否定する。可愛いなあ…

「で、何て言おうとしたの?」

「あ、はい…あの、出来たらで良いんです…エフオールに女の子らしい事を教えて下さい!」

「…はい?」

「さつきも話したように、あの子はずっと戦う事以外何も知らずに過ごしてきました…私も色々試してはみたんですが空回りばかりで…無理にとは言いません。出来る範囲で構いません」

そう言った果林は真剣だった…。そこまで言われちゃ無碍には出来ないな

「分かった…出来る限りの事は協力するよ」

「ありがとうございます!レンヤさん!」

「気にしないで、強引に旅に付いて行くようなもんだし、それくらいの見返りは当然だよ。それにしてもエフオールは幸せだね」

「え?何故ですか?」

「だってさ、こんなにも相手を思ってくれる優しい子がパートナーな

んだもの」

そう言つて果林の頭を撫でる。ちよつと恥ずかしそうにしていたが、若干嬉しそうに見えるのは俺だけだろうか

「レンヤさん、恥ずかしいです／＼」

「ああ、ごめん。嫌だった？」

「嫌では…無いです：／＼」

「そっか…さて、そろそろ行くかうか。エフオールが待ちくたびれてるだろうからな」

「あ、はい…そうですね…つてあの子つたらもうあんな所まで」

ギリギリ視認出来るか出来ないかぐらいの距離までの所にエフオールは居た、早いなし

「じゃあ行きましょうか」

「ああ、そうだな」

果林の言葉に頷き、俺達は歩き出す。……女の子らしい事って何があるんだろうし

今更ながら重要な事に気が付く俺だった…